「平成２６年度普及に移す成果」

イネ縞葉枯病に対する育苗箱施薬剤の防除効果

みんなで進めよう
茨城農業改革

農業総合センター農業研究所

近年、県西地域でイネ縞葉枯病の発生が増加しており、減収に至る被害も発生しています。イネ縞葉枯病はウイルス病であり、発病してからは治療する方法がありません。このため、イネを吸汁する際にウイルスを媒介するヒメトビウンカを防除して、感染の機会を減らす必要があります。

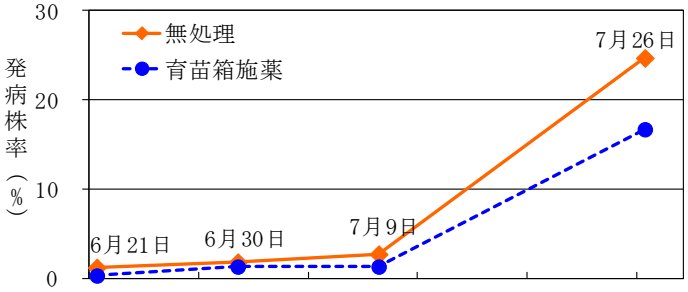
そこで、ヒメトビウンカの省力的な防除法として、育苗箱施薬によるイネ縞葉枯病への防除効果を明らかにしました。

イネ縞葉枯病にかかった水稲のゆうれい症状（上図）

縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカ（左図）の雄成虫（左）と雌成虫（右）（体長 3～4mm）

育苗箱施薬でイネ縞葉枯病の発病株率が低く推移

ヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬を行うと、イネ縞葉枯病の発病株率は無処理と比較して、低く推移します。

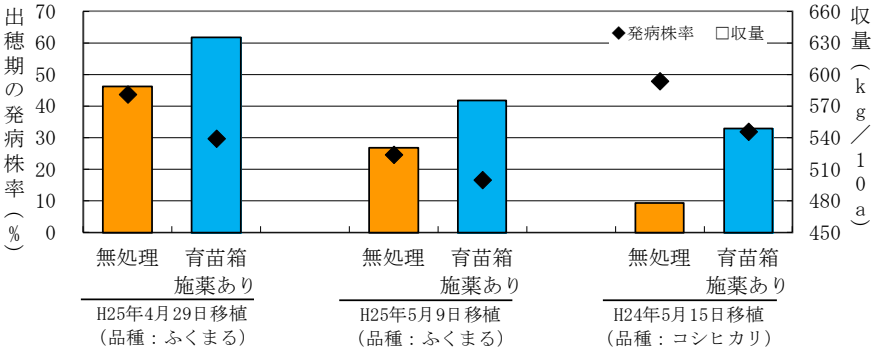


育苗箱施薬の有無とイネ縞葉枯病発病株率の推移（H25 年）
1）品種「ふくまる」（移植日：４月 29 日）での試験結果
2）育苗箱施薬剤はクロチアニジン粒剤（商品名：ダントツ箱粒剤）を使用

発病株率を低く抑えて、減収を軽減

イネ縞葉枯病の発病株では、健全な穂が少なくなるため減収します。

４月末から５月中旬移植の水稲において、ヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬を行ったところ、イネ縞葉枯病の発病株率を低く抑え、減収を軽減できることがわかりました。



育苗箱施薬の有無とイネ縞葉枯病発病株率と収量（H24・25 年）
1）育苗箱施薬剤はクロチアニジン粒剤（商品名：ダントツ箱粒剤）を使用
2）発病株率は出穂期～穂揃期に調査

成果を利用する際の留意点

- 育苗箱施薬に用いる薬剤は、茨城県病害虫防除所から平成 25 年 11 月 26 日に発表された「病害虫速報 No.6」に掲載されているものを参考にしてください。
- イネ縞葉枯病が多発生する地域では、イネ縞葉枯病に抵抗性のある品種を栽培する場合でも、ヒメトビウンカの防除を行い、地域内の発生密度を高めないようにすることが大切です。
- 試験に使用した農薬は、平成 26 年４月１日現在、水稲に登録のある薬剤です。

＜　問い合わせ先：農業研究所病虫研究室 Tel 029(239)7213　＞